2006 年 12 月 2 日

平成 18 年度武蔵工業大学市民講座

第 7 回　7-１農のある暮らしの風景～ドイツの事例から～　7-2 農を生かした持続可能なまちづくり～パーマカルチャーとエコロジカルな暮らしのデザイン～

7-1「農のある暮らしの風景～ドイツの事例から～」武蔵工業大学教授で、本講座の実行委員長である岩村和夫氏のお話をお聴きした。岩村氏はドイツ、フランス、中東などでのお仕事の経験が豊富で、奥様がドイツ人、自宅もドイツにお持ちと言う申し分ない環境でのドイツの事例報告であり、非常に、感銘を受けるご報告であった。時間の関係もあって、事例は二つに絞って報告された。（1）ミュンヘン市内にあるシュヴァイスフルト財団とそのエコロジーファーム、（2）カッセル：現代アートとエコロジーの町。自然な循環（エコロジー）を、私たちの生活や社会のもう一度持ち込み直そうとするとき、直面するのは現代の産業社会の論理やシステムをどう変革し、あるいはそれらとどう折り合っていくかという課題である。報告事例は完璧な回答ではないが、行くべき一つの方向を示していたと思う。

7-2「農を生かした持続可能なまちづくり～パーマカルチャーとエコロジカルな暮らしのデザイン～」日本大学教授で、NPO 法人パーマカルチャー・センター・ジャパン代表理事でもある糸長浩司氏のお話をお聴きした。人類は前工業時代（持続可能文化）から、大量の化石エネルギーの使用による工業成長時代（近代文化）へ進み、豊かで快適な生活を謳歌しているが、オイルピーク論で、警鐘が鳴らされている石油資源の枯渇やエコロジカルフットプリント論で、自然循環を越えた地球への負荷が指摘され、負荷を減少させるためのライフスタイルの転換、社会・経済構造の変換のための実践が緊急の課題と指摘し、下降文明（パーマカルチャー）そして、低エネルギー持続可能社会へのアプローチについて諸外国の事例と大学構内での実験、パーマカルチャー教育プログラムについて説明があった。パーマカルチャーとはパーマネント（永続性）とカルチャー（文化）あるいはアグリカルチャー（農業）の合成語である。パーマカルチャーは身近な場での永続的な食料生産をベースとし、自然と共生した生活空間の持続的な創造を目的とし、地球へのケアー、人間へのケアー、生産した余剰物の公平な分配という 3 つの倫理観を大切にいる。今回のご講演エネルギー枯渇への対応の一つの試みついての説明であり、賛同者の輪をどのように広げてゆくかが今後の課題である。ご講演の中に 3 つのエコロジー（生態系、社会・経済性、精神性）という表現があったが、私はたまたま中沢新一著「森のバロック」読んだ後だけに、南方熊楠のエコロジー思想（自然生態系に対する配慮、人間の主観性の生存条件と人間の社会生活の条件の一体的展開）と同一であることに強い感銘を受けた。（せりか書房 1992 年 P324）